

中村光夫全集

第十二卷

筑摩書房

中村光夫全集 第十二卷
昭和四十七年八月二十五日発行

著 者 中 村 光 夫

発行者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一九一
電話 東京 四七六五一 (代表)
振替 東京 四一 二二三
印刷 株式会社 精興社
製本 牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72512 (出版社) 4604

第十二卷目次

旅行記

戦争まで

パリ通信……………5

戦争まで

I トゥールの宿

一、避難船……………27

二、バルザックの故郷……………36

三、未知の土地……………45

四、初夏の街……………59

II ロアルの宮殿

一、ロッシュの城……………72

二、イタリー戦争……………83

三、ルネッサンス宮殿	89
四、シュノンソーの離宮	105
III 戦争まで	115
クータンスの街	237
トルーヴイルの夜	253
後記	265
旅の話	
スペインの話	272
夏のエジプト	299
ドイツ遊覧	305
イギリスの秋	317
イタリアのひと月	327
キュプロス島	338
トルコの話	344
あとがき	372

戦禍のフランス	373
中国の旅	381
ラナイ島行	389
西欧のなかの東洋	398
ペテルゴフの噴水	401
レニングラードの二葉亭	404
パリ滞在記	407
ポルドーの印象	412
ハワイの生活	415
文明論(一)	
歐洲戦争と知識階級	427
日本の過去	436
西洋に学ぶもの	437
現代文化の心理	438

海外通信	450
危機の意識	461
知識と信念	464
軍人の精神	474
「近代」への疑惑	481
文学者の心	492
時勢について	493
教科書	496
美術と文学	503
怠惰の芸術	506
自我の拡散	513
哲学的自殺について	518
明治文学と家族制度	524
文学に現はれた夫婦生活	529
「検閲制度」の亡霊	538
利口すぎる民族	540

東京大学	546
公開された雅楽	557
北大路魯山人	560
尾道今昔	565
はにかめる栗鼠・日本人	572
葬式について	583
失はれた天皇の地図	593
「移動」の時代	606
天皇の名の下に	617
青年と自殺	626
現代の表情	629
解説	681
大岡昇平	
解題	687

旅行記

戦争まで

——フランス旅行記

Pour l'enfant, amoureux de cartes et d'estampes,
L'univers est égal à son vaste appétit.
Ah! que le monde est grand à la clarté des lampes!
Aux yeux du souvenir que le monde est petit!

Baudelaire—*Le voyage*

パリ通信

しばらく御無沙汰しましたが、お変わりありませんか。この間うちイタリーからときどきだした葉書、届いたでせうか。あの旅行も突然きまつたので、同じ日本館にゐる鉄道省の技師が、この冬自動車でイタリーへ行きたいのだが、大ぜいで行くと非常に安くつくから一緒に来ないかといふので、素人の運転で少し危いけれど、とにかくチャンスだと思つたのもう一人去年来た仏文の友達を誘つて、三人で出掛けたわけです。

往きのフランス国内はひどい雪道で、河にとびこみそこねたりして、命拾ひしたことも一二度ありましたが、イタリーに這入つてからは天気も大体順調で、僕等があまり博物館ばかり見たがるので、技師先生少し迷惑するといふやうなこともありましたが、それでも三人とも年は同じくらゐだし、高等学校のと時から多少知り合ひなので、お互に気兼ねも遠慮もなく、まづ愉快に一月ほど廻つてきました。

イタリーで一番面白かつたのは、やはりルネッサンス芸術で、さすが本場だけのことはあると思ひました。フランスと違つて、冬でもからりと晴れた青空を背景に、白大理石を惜しげもなく使つて建てられた寺院や宮殿の輪郭や、またそのなかに収められた絵や彫刻は、實際目の醒めるやうな美しさで、現代のムッソリニがいくら威張つたところで、とてもあれには敵ひません。

ローマでもフロレンスでも、毎日、朝から日のくれるまで、博物館を見てくりました。イタリーの博物館は、大概昔の宮殿で、まづその建物や庭が実にきれいです。それからなかに這入るとまた大変で、アンドレア・デル・サルトとか、ジオット、ラファエル、チチアン、ボチチエリなど、名前をあげたらきりがないのですが、とにかく、ルーヴルあたりへ行つても一枚か二枚大事さうに飾つてある画描きの絵がずらりと並んでゐて、くたくたになるほど歩いても見切れないほどあります。初めのうちは、ラファエルとかコルレジオなどの絵にぶつかる

と、ああこれがさうかと思つて、どきりとしてしまつて、無我夢中で見てまはつて、むやみと昂奮したり疲れたりしましたが、そのうちだんだん落着いて見られるやうになりました。数をみてゐるうちに、色々な画家の作風をくらべて味はふ余裕もできました。さうなるとまた面白くなつて、といふより何となく新しい眼が開いて来たやうな気がして、前に見た絵がもう一度見たくなつて、柄になく早起きしてもと行つた博物館にまた出掛けたり、要するに他愛なく夢中で暮りましたが、ただ金がなくて長くゐられないのがつくづく残念でした。

ローマで一番大きいのは、何といつてもやはりヴァチカンの博物館で、それにつぐのは小さいけれど作品の粒が揃つてゐるボルゲーゼ博物館、それからナショナル・ミュージアム、コルシーニ宮、ファルネーゼ宮のコレクションといふ風にいくらみてもあとからあと博物館がある上に、方々のお寺に散らばつてゐるミケランジェロの彫刻とか、さういふものを見てまはるにも時間をとられるし、またバラチノの丘の近くのローマ時代の遺跡を見物するのも一日がかりだといふ風に、僕等の滞在日数ではどんな無理してもとても全部はまはりきれないし、またトーマス・クックの団体旅行のやうに急行列車みたいに博物館のなかを廻つても無意味だと思つたので、ローマでもフロレンスでも代表的な博物館だけを出来るだけゆつくり見ること満足しました。

だから僕等が見た絵の数は、イタリー全体からみたらほんの云ふに足りないものかも知れませんが、それだけでも充分堪能しました。ああいふ絵を見る機会はもう一生に二度とないにしろ、とにかくそれを見たのは非常によかつたと思ひます。あの時分の気持をあとから考へるとまるで夢のやうですが、その夢のやうな印象を今から辿つて見ても、世の中に美といふものはたしかにある、それを実現した人がゐるといふことを生ま生ましい本物で見せられたといふ気がします。イタリーの絵は実に綺麗です。綺麗といつたら、実になんともかとも綺麗であのくらの原色を大胆につかつた明るい派手な絵はほかにないだらうと思ひます。初めて見ると、ただその美しさだけでも、ぼつとしてしまひます。しかしさういふ綺麗な絵の流派だけに、ただ絵具を塗ることが巧かつただけの画家も相当にゐるやうです。どの博物館へ行つても、大半はさういふお約束を守つて画いた腕達者だけの絵がかかつてゐます。ただ綺麗なだけの死んだ絵です。さういふ絵は専門家がみたら色々流派の特色とやらが解つ

て面白いのかも知れませんが、僕等には一向面白くありません。

しかし、さういふなかで、本当にすぐれた絵は最初からどこか違ひます。同じ原色をつかつて、ラファエルの青、チチアンの赤のやうに、先人は思ひ及ばなかつたし、弟子達がいくら真似しても及ばないやうな、一種何とも云へない色をしてゐます。布一枚の鬘のつき具合にもどこか他の絵から際立つた美しさがあります。そして中心の人物に至つては、何といふ相違でせう！と僕が一人で昂奮しても始まりませんが、コルレジオの描いた女の肌の色をお見せしたいと思ひます。(支那ばかりへ行かず一度フロレンスへいらつしやいとここで云ひたいところですよ)時代をへだたてて見るのはおそろしいもので、さういふ本当の名人と、ただ時流を追つただけの腕達者な画描きとの区別は僕等にもすぐつきまします。

本当の名人とは色彩と形で自分の世界を築くことを知つてゐた人達です。そこに自然の生命を捕へることのできた人達です。

さういふ絵をじつとみてゐると、いつのまにかあたりがしんとして来て、豪壮な博物館の部屋もほかにかかつてゐる絵もみな消えてしまつて、ただ額縁のかこむ世界から画題の人物が宙に浮かびあがつて来るやうで、そこには僕等が普段住んでゐる時間も空間もなく、ましてや色彩と形の戯れもなく、ただ美に殉じた魂がそこに生きてゐるといふ気がします。

僕もそのまへで幾万人目かにつとりに来てたわけですが、幸ひ博物館は季節外れだとみえてどこもひどく空いてゐて、たまにアメリカ人らしい団体のお客がどやどや這入つて来たり、すぐどやどや出て行くほかは、大概どの部屋もほかに見物人がゐないか、または一人二人ゐるくらゐなので、好きだけゆつくりみられていい氣持でした。

ローマでもフロレンスでもしまひには旅費は怪しくなつて来るし、儉約のつもりで小さなレストランへ這入るとそのわりに高くてひどくまづいものを食べさせられたり、イタリー語ができないところから、馬車やタクシーにぼられたり、大分いろいろな目に会ひましたが、一日にいくつか本当にいい絵や彫刻がみられれば、そんな不

愉快や心配は一切忘れられました。(イタリーの博物館はフランスとちがつて、国民のためといふより主として外客誘致用らしく、ルーヴルあたりに行くと美術学生や家族連れの見物人がいつも一杯で有名な絵のまへには人がゐないことはなく、そのほかに、少年団みたいな制服を着た腕白小僧共や田舎の女学校の修学旅行らしい団体がいつ行つても一組や二組はゐて、いつもやかまじすぎる位にぎやかですが、反対にイタリーの博物館はいつもひっそり閑としてゐて、たまに出会ふのは大が案内者をつけた外国人で、かんじんのイタリー人はひどく少ないやうでした。こんなところからも今のイタリーの国情がうかがはれるといふやうなことも云へば云へると思ひますが、まあそんなことよりルネッサンスの絵の話が続けた方がいと思ひます。かういふ話は得てして勝手な推測に終りやすいけれど、僕がルネッサンスの絵にむやみに感心してしまつたことだけはたしかな事実です(ら)。

どういふわけでそんなに感心してしまつたか、自分でもよくわからないのですが、考へて見ると、イタリー・ルネッサンスの絵が本質的に云つて誰にも解りやすい絵なことが一つの原因ではないかと思ひます。

ルネッサンスが近代ヨーロッパの曙光となつた文明だとしたら、あれほど野蛮な、同時に素直で健康な文明はないと思ひます。

新しい文化との接触が、その結果として人間の持つあらゆる自然の解放をもたらした。しかもその解放が極めて自然に行はれたといふところに、あの時代のユニークな価値があるのではないかと思ひます。實際僕等がルネッサンスの絵をみて、一番うたれるのはその暢び暢びした自然さです。

あの頃の絵はどれも巧いといつたら実にうまく、實際絵の技巧の極致なのでせうが、そこに表現されたものが自然の持つ力を少しも損はれてゐないので、その技巧は画家の技巧よりむしろ自然そのものの技巧といつた気がします。神様をスピノザのいふやうに考へたら、神技とはあつた技巧を云ふのでせう。つまり人間の持つあらゆる自然な感情がそのままの力を失はず極度まで純化されたやうな絵で、解りやすいと云つたらあのくらの解りやすい絵はありません。僕等はただ普通の感情を持つ人間としてそのまへに立てばいいわけですから。

かう云つたところでルネッサンスの絵の美しさを御伝へするわけには行かないので残念ですが、僕がむやみと感心した理由は御解りになつて下さると思ひます。

実際かう単純に、さうして正確に把へられて見ると、人間と云ふものは何と美しい動物かと思ひました。そしてこれ画いたのも人間かと思ふと人間に生れて来たのが有難いやうな空恐ろしいやうな気がしました。

ローマのボルゲーゼ博物館、フロレンスのウフィツジ宮などの内部は丁度お伽斬にでて来る魔法の杖で造られた花園にたとへられるでせう。夢中でまよひ込んで行くと、そのけんらんとした美しさは到底此の世のものではありませんが、しかもその人工の花園に咲きそろつた花は決して慥へものでもなければ、想像力の幻覚でもありません。みな自然から充分に養分を吸つた大輪の花です。ゆたかな日光をうけ、新鮮な露を含んだやはらかな花です。

少々美文めいて来て恐縮ですが、ルネッサンスの絵には何かかうでも云はなければ現せないやうな美があります。綺麗なことは悪夢のやうに美しくせに何か同時にひどく生ま生ましい健康な精気が迸つてゐて、さういふ所が近代の絵とは違ふと思ひましたし、またそこに一番感心もしました。今ここで自然に思ひだすのは、ポチチエリの絵ですが、たとへばあの「春」などは、樹木の若葉や日光をうけた草原などを背景に、四五人の若い女が軽く立つてゐるといふ構図で、その女の肌の色が春の日光をうけた樹木の緑に溶けこむやうで、実に美しい絵ですが、この絵の一番驚くべき点は、その美しさがそのまま生命の讃歌として僕等に感じられることです。ルネッサンスの絵の優れたものはみな健康な歌を持つてゐます。

あの絵そのものが人間の讃歌だと思はれました。そこには美とか青春とか、または生命の歓喜とか、僕等が普段の生活ではほとんど忘れてゐる言葉が立派な内容を持つて生きてゐます。さうしたもののだけが絵の題材だとさへ思はれました。そこに描かれた人物はみな生れながらの慾情に暢び暢び生きながら、その放恣な姿態には何か世の汚れを知らぬ純潔な力があります。明日を知らぬ青春の輝きがあります。言葉をかへて云へば、あの頃の絵に表現されたものは、人間の観念でもなければ、社会の劇でもありません。あるものはただ純潔な肉体の詩です。